座談会

空襲に次ぐ空襲から、どうやって生き延びてきたか
川島 巖／長谷部 俊一

辛かった疎開生活と恐ろしかった空襲
小林 東太郎／榎本 芳弘／三村 榮一／髙野 登喜

毎日食べること、生き延びることしか考えていなかった
女部田 金造／櫻井 守

空襲に次ぐ空襲から、どうやって生き延びてきたか

同じ昭和6（1931）年生まれながら、3月生まれの川島巖さん（84歳）は学徒動員で工場勤務を経験。9月生まれの長谷部俊一さん（84歳）は、学徒動員に行く予定日に終戦だったそうです。わずかな違いが運命を大きく分ける戦時中の体験、また戦中戦後の食糧難の思い出などを語っていただきました。

かわしま いわを
川島 巖
神田神保町

はせべ しゅんいち
長谷部 俊一
神田神保町

インタビュアー
長嶋 泰（大学1年生）
富山愛茉美（大学3年生）

戦争によって仕事を換えさせられた家族たち

——お二人の生まれた年と、出生地。それから戦争当時のご家族について教えてください。

長谷部　私は昭和6（1931）年に、神田神保町1丁目で生まれました。

川島　私も6年ですが、早生まれだから学年は1つ上ですね。お隣の神保町2丁目の生まれです。家族は両親と姉が1人、弟と妹の6人家族です。

長谷部　私もきょうだいは5人。上に女が2人、下に妹が1人と弟が1人います。

——ご両親のお仕事は。

川島　父親は製本業をやっていました。兵隊に取られる年齢ではなかったけれど、戦争中は出版統制もあって他に仕事を探さなければいかなくなり、立川飛行機（陸軍の軍用機を製造する航空機メーカー）の関連企業で終戦まで働いていました。

長谷部　私の家は食堂を営んでいて、けっこう繁盛していたのですよ。ところが戦争が始まると米が配給になったり、外食券というものがないと外食ができなくなるなど、だんだんに飲食業をやっていくのが難しくなってきた。それで父親は地区の防空群長をやって、町内に防空壕を掘る仕事などをしていました。

——疎開は、なさらなかったのですか。

川島　空襲が激しくなってから、おふくろが下の弟と妹を連れて実家のある小山（現・栃木県小山市）へ疎開しました。上の姉と私、それと父親が神田の家に残っていました。

長谷部　私の1学年下から学童疎開へ行くことになり、弟と妹は埼玉県のお寺へ入っていましたよ。食べる物に不自由しているとかで、不憫に思った母親がよく食料を届けに行っていたのを覚えています。

不発の焼夷弾を見学する余裕があった頃

——空襲の体験を、お聞かせください。

川島　私の妹が生まれたのが昭和17（1942）年なのですが、その少し前にサイパンが陥落してアメリカ軍機が日本に飛んで来やすくなった。日本本土が初めて空襲を受けたのが、4月でしたね。荒川や王子の方と、こっち側でも飯田橋から早稲田へ向かってやられたのが1回目ですよ。九段下の向こうの、中坂のあたりにも焼夷弾が落ちました。

長谷部　その時私は中学生で、校門のところで爆撃機が飛んでいくのを見ましたよ。あのときはたしか、B17だったね。

川島　そうそう、私の記憶でもそうなんだけど。この前「昭和館」で調べたら、B25って書いてあるんだよ。おかしいなあと思ったんだけど、長谷部さんもそうおっしゃるなら私の記憶違いじゃないのかな。ただB17もB25も大きな爆撃機じゃないから、爆弾の数は少なかった。だから最初のうちは、空襲があっても火災はあまり大きく広がらなかった。最初の空襲で中坂の民家が燃えたときも、「婦人会がバケツリレーで消した」と、新聞に出ていたものです。

長谷部　バケツリレーは、学校の教練でもやらされましたね。

川島　空襲も最初のうちは中高度から軍事施設なんかを狙って爆撃していたから、撃ち落とされる敵機もけっこう多かったでしょう。

長谷部　後楽園に高射砲（高射砲第一一八聯隊）があって、B29にもけっこう当たっていた。学士会館の屋上には機関砲があって、夜間になると曳光弾がとっとっとって撃ち上がるのが、家から見えました。

川島　麹町のお堀の向こうに、B29が落ちたときがありましたね。遊び半分で見に行っちゃ怒られるかと思って、行かなかったけれども。

――日本も、最初の頃は応戦していたのですね。

川島　ただ向こうも利口だから、終いには飛行機の下に厚いゴムを張って弾が当たっても機内まで入らないようにしていたと、戦後になって聞きましたよ。日本の飛行機はB29ほど高く飛べないから、機体の上は守らなくていいんだ。

長谷部　戦争末期になると、高い高度からの無差別な空襲が多くなってきましたね。

川島　昼間は、1万メートルだか上空を飛んでくるからすごく小さくしか見えない。偵察に来るんだろうけど、あれはしゃくにさわったね。そうして目標を定めておいて、夜間に大量の爆弾や焼夷弾を落として行くんだから。

長谷部　焼夷弾というのは、嫌な爆弾でしたね。六角柱の形をしていて、お尻の方の信管が押されると油脂がびゃっと出て来る。すごくベトベトした油だから、くっつくと取れない。

――油脂をゲル状に加工してあったそうですね。

川島　コンクリートのような硬い地面に信管が当たると、その油脂がぶわーっと高く上がるんです。あるとき水道橋の近くの日大の校舎に焼夷弾が落ちたのを見たけれど、校舎よりも高々と吹き上げるんだから恐ろしいよ。

長谷部　当たった瞬間に火がついて、火柱がわっと上がる。

川島　線香花火をご存じだろうけれど、あれを逆さにして、火花を放つ火玉の大きいようなのが上空からどんどん降ってくると想像してみてください。その火玉が地面の上で燃え上がるんです。

長谷部　焼夷弾は、ときどき不発のものもありましたね。

川島　舗装されていない土の上へ散ると、刺さったまんまで爆発しない。その不発弾を、神保町の交差点にあった交番の前に飾ってありましたよ。みんな通る人が見ていったりして。その頃はまだ、余裕があったんだね。

防空壕の跡に立つ「焼けぼっくい」の正体は

長谷部　サイパン島が陥落してから様子ががらりと変わった気がします。

川島　それからはもう、B29の独壇場ですよ。大きな機体に爆弾をいっぱい積んで、毎日のようにやってきました。

長谷部　毎晩、夜の11時半、12時になるとラジオから「B29、1機、本土に向かって飛行せり」なんてニュースが流れる。御前崎から入ってきて、右へカーブして三鷹の方から房州を抜けて帰るというのがお決まりのコースでした。

川島　要するに、富士山を目指して来るんだ。朝昼晩もかまわないし、今日来たら、明日は来ないかと思えば来る。

長谷部　それが毎日なのだから、われわれも神経衰弱になりましたね。

川島　寝るときも靴を履いたまま、足だけ布団から出して横になったものです。

長谷部　足にはゲートルを巻いていました。

――空襲警報を聞いたら、防空壕に入るのですか。

長谷部　防空壕を一生懸命に作っていらした川島さんのお父さんには申し訳ないけれど、防空壕に入ったほうがおっかないんです。むしろ表へ出て、飛行機の位置をしっかり見たほうが利口なの。爆撃機が自分の方へまっすぐ飛んで来て、通り過ぎた先で爆弾を落とされるのがいちばん危ない。だから飛行機の行く先を見極めて、右か左か、どっちかへびゅっと逃げればいい。

――そうなんですか。

川島　最初のうちは、おっかなくて縮こまっていたけれど、空襲が繰り返されるにつれて、慣れるというか図々しくなるというか（笑）。

長谷部　防空壕の中で亡くなる方もいました。今考えれば、父親が掘っていたような小さな防空壕をいくら用意しても、役には立たなかったでしょう。

川島　私は3月10日の大空襲の3日後、焼け野原の下町まで歩いて行ったことがあります。家の焼け跡に焼けぼっくいのようなものが立っていると思ったら、人の足でしたよ。

長谷部　焼け野原の景色というのは、それはむごいものでしたね。

川島　結局、初期の空襲でぽつりぽつり焼夷弾を落としても、すぐに火を消されてしまう。だから3月の大空襲では、下町の周囲からどんどん爆弾を落として、最後に中心部を攻撃した。だから多くの人が逃げ遅れて死んだんです。

長谷部　あの日、神保町界隈での被害はそれほど大きくなかったのですが。

川島　九段坂から見上げると、富士見町の辺りに、例の線香花火みたいな火の玉がいっぱい見えました。驚いて外へ出た時、手に持っていた新聞の文字が読めるくらい空が明るかったのを覚えています。そうして翌日になると、駿河台下の方から市ヶ谷に向けて、下町から焼け出された人が隊列をなしてくるのが見えました。皆さんが、目を拭き拭き歩いているので、どうしたのかと思ったら、火にあおられて涙が止まらなくなっていたんだね。

――お二人の家も、空襲の被害に遭ったのですか。

長谷部　私の家は、昭和20（1945）年2月25日の空襲のときに焼夷弾が3階建ての屋根を突き破って、家の中に落ちてきました。ただ焼夷弾というのは普通、何十発も入った「親」（カプセル）が空中でばらばらに外れて地上に落ちてくる。その親のままストーンと落ちてきたものだから、油脂が飛び散らなかったんです。

川島　それは幸いでした。

長谷部　火はついたものの、私と近所の仲間の3人ほどでなんとか消すことができました。

川島　私の家は、4月13日の空襲で家の前にあるお風呂屋さんが焼けて煙突が倒れたんです。私はそのとき母親の実家の栃木にいたのですが、神保町がやられたとラジオで聞いて、朝5時の電車で東京へ帰ろうとしました。ふだんは1時間足らずで着くはずが、お昼になっても大宮まで着かない。蕨までやっと来たところで、隣に貨物列車が停まったから、これなら動くかと思って乗り込んだのだけど、これも動かない。しょうがねえと思って、そこから線路の上を歩いて行きました。なんとか神保町に着いたときには、夕方4時になっていました。

――ご家族は無事でしたか。

川島　家に帰ると、父親が「全身が痛い」とうんうんうなって布団で寝ていました。

――ヤケドですか？

川島　いや、煙突が倒れたときの爆風で飛ばされて、全身を打ったらしい。それから1週間ほど寝込んでいましたよ。

磯子のアサリ、お堀の鯉

――お二人とも、学徒動員には行かれたのですか。

長谷部　私は行かなかった。都立工芸高校の2年になった年、「8月から動員だ」と言われていたのだけど、ちょうど終戦になって行かなくて済んだんです。姉の1人は、有楽町にあった日劇（日本劇場）で風船爆弾を作っていました。今、有楽町マリオンになっている場所ですよ。

――そんなところで風船爆弾が作られていたのですか。

長谷部　水素が漏れないかテストするため、気球を天井からぶらさげられるような高さのある建物が必要だったそうです。

川島　私は簿記の勉強で商業高校へ通っていたのですが、2年の時から学徒動員で軍需工場で働いていました。東陽町にあった工場は3月10日の空襲で焼け、その後は横浜の工場へ移る予定だったのだけど、集合予定の日がちょうど横浜の大空襲ですよ。結局は磯子にある海軍の兵器工場へ呼ばれて、そこで終戦まで機関砲の弾を作っていました。

――工場では、どんな思い出がありますか。

川島　仕事はきつくて大変だったし、作っている薬莢をうっかりポケットに入れたまま工場の外で憲兵に見つかろうものなら、大変な目に遭いました。ただ、13～14歳の子供が集団で生活しているのだから、悪さはしょっちゅう（笑）。あんまりいたずらばかりするもんだから、寮で「お前らは職員室の隣で寝泊まりしろ」と。それでも夜中に騒いでいると、引き戸のベニヤに開いた節穴から先生が覗いて、「こらー」って怒鳴られる。

――どんないたずらをしたのですか。

川島　工場の裏の丘から野イチゴを集めてきたり、近所の庭先からザクロの実をもいだり。いちばんおっかなかったのは、友達5人と磯子の海岸でアサリを夢中で採っていたら、地元の漁師さんに囲まれちゃってね（笑）。

長谷部　そりゃあ大変だ（笑）。

川島　向こうも5人だったんだけど、1対1になれば子供のほうがすばしっこい。アサリもバケツも投げ出して、ばっと散り散りになって逃げ切りましたよ。掃除で使うバケツだったから、それも先生にこっぴどく叱られた。

長谷部　やはり食べ物がらみなのですね。軍需工場に行けば、食べ物は豊富にあると聞かされていましたが。

川島　世間の暮らしよりは、多少ましだったと思います。肉も野菜もありましたから。ただ私たちはジャガイモなどでかさ増しされたご飯だったけど、工場を守る兵隊さんは真っ白なご飯でね。子供心に、「あっちはうまそうだ」と思っていました。

――工場で働いていれば、お腹も空くでしょうね。

川島　3時のおやつも、お菓子じゃなくて雑炊でした。それでも腹持ちが悪いと訴えると、炊事の人がかわいそうに思って、米の配給券を用意できたらおにぎりを出してくれると。それでみんなから券を集めて、おにぎりとたくわん1～2切れを食べるのが楽しみでした。

――玉音放送は、工場で聞いたのですか。

川島　広場へ集められて、みんなで並んで聞きました。最初は意味が分からなかったけれど、「堪え難きを堪え、忍び難きを忍び」の所で、ああ負けたんだと。おおっぴらには言えないけれど、内心喜びましたよ。周囲の友人とも、「終わったな」「帰れるな」と目配せし合ったものです。

長谷部　私は自分の家で、家族と聞きました。聞き終わってふらっと表へ出たら、P51って戦闘機が焼け跡の向こうから私を目がけて飛んできた。

――終戦の日にも、ですか。

長谷部　昼の12時過ぎたら、ぴたっと終わりましたけどね。その日の朝までは、機銃掃射もあったんですよ。

川島　私はそれまでも先生の代行のようなことをしていたので、玉音（放送）を聞いてからも工場に残って移動証明書というのを作らなけれ

ばいけなかった。配給をもらうにも居場所の証明書が必要だったんです。それで同級生と上級生の3人で、3日間かかって生徒全員の住所を書いて渡して。それをやり終えてから帰ったから、余計に「戦争が終わった」という意識がありました。

――ご両親も喜んだでしょう。

川島　寮を出るときにくじびきで、セメントでできた炊事用のコンロが当たったんです。それを担いで神田の家まで帰りました。その年の11月にはおふくろたちも栃木から帰ってきて、やっと家族が揃いました。

長谷部　わが家も、埼玉へ集団疎開していた弟と妹が帰ってきました。

――食糧事情は、戦後もなかなか改善しなかったのでしょうか。

長谷部　むしろ戦後のほうが、ひどかったんじゃないですか。お米が本当に手に入らなくなって、うどん粉を練ってすいとんにしたり、サツマイモをふかしたようなのが主食という家庭が多かった。

川島　配給される農林1号ってサツマイモは、まずくて食えたもんじゃなかった。

長谷部　アメリカ軍からの放出物資では、おいしいものがたくさんありましたね。コンビーフの缶詰などは、うれしかったですよ。育ち盛りで、肉に飢えていましたから。

川島　忘れられないのは、ベーコンの缶詰。

――ベーコンがそのまま入っているのですか。

川島　長ーい缶に薄切りベーコンが入っているのを、1枚ずつつまんで抜くわけ。塩味が適度に効いていて、あれはうまかった。日本のスーパーで今売っているベーコンとは、全然別物だね。あれはもういっぺん、食べてみたいなあ(笑)。

――今まで鬼畜米英と呼んでいたアメリカ軍に対して、恐怖感はなかったのですか。

長谷部　それはありましたよ。年頃の娘は、「田舎の方へ隠れていろ」と言われて。

川島　そういえば、戦後しばらく街には男ばかりが目立ったね。配給を取りに行くのも、姉じゃなくて私が行かされた。バケツ1杯、イワシをもらったこともあったなあ。

長谷部　戦後の食べ物で思い出すのは、お堀の鯉ですね(笑)。憲兵隊司令部の前にあるお堀で、でっかいのが釣れたんですよ。サツマイモを釣り針の先へつけて、ぽーんと遠くへ放ると、面白いようによく釣れた。

川島　戦争中は、憲兵にみつかると大変だから釣竿が立てられず、糸だけ垂らして釣ったもんだけど。

長谷部　戦後はその心配もなくなりましたからね。自由に行動できるというのは、嬉しいもんだったんですよ。

――そうした体験をふまえて、私たち若い世代に伝えたいことは何でしょうか。

長谷部　年寄りがあまりしゃしゃり出ても、仕方ないと思います。ただ一生懸命に勉強して、それを世の中に役立てるように心がけてほしい。言いたいことはそれくらいですね。

川島　さっきB29から逃げる方法を教えたけれど、何だって自分の目で見て判断して、自分で考えて行動するのが大事です。ニュースや何やらの情報が飛び込んで来るのを、ただ鵜呑みにするんじゃなくてね。それは忘れないでもらいたいです。

写真左から、富山さん、川島さん、長谷部さん、長嶋さん

辛かった疎開生活と恐ろしかった空襲

小学校1年生で新潟へ縁故疎開をした小林東太郎さん（78歳）、疎開先でのいじめを乗り越えた榎本芳弘さん（83歳）、東京で激しい空襲を経験した三村榮一さん（82歳）、疎開先での空腹に辛い思いをした髙野登喜さん（84歳）。それぞれ当時を振り返りながら、そのときの状況や様子、思いを語っていただきました。

こばやし とうたろう
小林 東太郎
神田東松下町

えのもと よしひろ
榎本 芳弘
神田佐久間町

みむら えいいち
三村 榮一
神田鍛冶町

たかの とき
髙野 登喜
神田鍛冶町

インタビュアー
安田律子（大学院２年生）
長嶋 泰（大学１年生）
西山侑里（高校２年生）

それぞれに疎開生活を経験

――本日は、3つ質問させていただきたいと思っています。1つ目は皆さんご自身のことについてお聞かせください。2つ目は戦争中、いちばん印象に残っていることについて教えてください。最後に終戦後のことについておうかがいできたらと思っています。では、皆さんご自身のことについてお話しいただけますでしょうか。

髙野　昭和6（1931）年、神田鍛冶町2丁目で生まれ育ち、ずっと鍛冶町に暮らしています。うちは今川橋の交差点の角で「髙野理科」といって板ガラスやフラスコなどの理化学用ガラスを扱う商売をしており、けっこう繁盛しておりました。もう廃校になってしまいましたけれど、旧今川小学校の出身です。

――小学校を卒業されたあとは、どちらへ進まれたのですか。

髙野　淑徳高等女学校に進学しました。傳通院さんの隣にある大きな立派な学校でした。戦争がひどくなって勉強どころじゃなくなり、軍需工場で風船爆弾の部品などを作っていました。女学校2年生の4月に、長野県の別所温泉へ集団疎開をしました。

榎本　私は昭和7（1932）年、生まれたのは神田佐久間町1丁目です。今はそこが事務所になっています。小学校は、やはり今はもうないですが旧佐久間小学校です。うちは炭問屋をやっていましたが、小学校3年生のときに商売ができなくなりました。というのも、昭和14（1939）年の統制経済で普通の商いができなくなってしまったんですね。だから、店と自宅をある会社に貸して、私たちは豊島区の椎名町に引っ越しました。私は集団疎開で辛い思いをしました。終戦は中学1年生のとき、疎開先

の栃木県の那須で迎えました。そのあと東京へ戻ってきて九段高等学校へ行きました。

三村　私も昭和7年生まれです。うちは神田鍛冶町2丁目で、髙野さんの近所です。小学校から暁星です。暁星は私立だから、私は疎開には行っていません。ミッションスクールですからお寺はだめなんですね。東京でもだいぶ物がなくなってきたけれど、なんとかやっていました。昭和20（1945）年2月25日の空襲で自宅が焼け、谷中の叔父の家で生活していて3月10日の空襲も経験しました。暁星は自動的に中学へ行けたからそのまま進学しましたが、3月におやじが亡くなり、それからは自分がおやじがわりとして、いろいろと頑張ってきました。

小林　私は皆さんより少し下で、昭和12（1937）年生まれです。出身は神田東松下町で、今もそこに住んでいます。武道館のあたりは近衛師団の兵営地でしたが、子供の頃に戦意昂揚のための軍旗祭があって、それに行ったのを覚えています。それから当時は、都電に乗っていたら、靖国神社や二重橋の前になると車掌の号令でお辞儀をさせられました。昭和19（1944）年に小学校に入学しましたから、終戦のときは小学校2年生でした。私はおやじの郷里である新潟県の雪深いところに1年間1人で疎開しました。伯父の家、つまり父の実家です。完全な農家の中で1年間の農業生活を経験しました。姉は集団疎開で埼玉の樋遣川村に行っていました。東京で空襲があったときは田舎にいたので分かりませんが、私の下にも子供が2人いたので、親は大変だったろうと思います。

――お聞きしていると、当時は小学校が多かったんですね。

三村　人口が多かったですから。旧神田区は商売をやっている家が多く、少年店員や住み込みの店員がたくさんいました。

小林　下がお店で上に地方から来た若い人たちが住み込み、店員として育てられていましたね。

ワサビの粉やツツジも食べた

――では、戦争中のお話を具体的にうかがっていきたいと思います。まず、疎開されたときのことを教えていただけますか。

髙野　私は女学校2年生の4月です。別所温泉に集団疎開しました。宿泊先は柏屋別荘という大きな立派な旅館でした。けれども、食べ物のないひもじさと、親から離れた寂しさったらありませんでした。東京へ帰りたかった。親のところへ帰りたかった。

　別所温泉にお土産屋さんはありましたが、何にも売ってないの。ワサビの粉しか売ってない。だからワサビの粉を買ってなめたり、ツツジの花を食べたり、青梅をもいで食べたりしました。よくお腹を壊さなかったと思います。なにしろ、食べるものがないというのがどんなに辛いか。でも、あのときは一生懸命でした。戦争に勝たなければいけないという思いしかなかったから。愛国精神のかたまりです。勝つまでは頑張ろうと、みんな文句ひとつ言わずに我慢していました。

　でも、私は5月に栄養失調になってしまったんです。上田の病院で診断書を書いてもらい、父親が面会にきて連れて帰ってもらいました。

私は家に帰れたからよかったけれど、残った皆さんは大変だったと思う。終戦のときには、温泉のお風呂に入って詔勅をお聞きになったらしいです。

――栄養失調になった人はほかにもいたのでしょうか。

髙野　私は帰ってしまったから分からないけど、いるんじゃないでしょうか。

三村　うちもそうですよ。埼玉に疎開していた４つ下の妹が栄養失調になりましたから引き取りました。だって、ろくなものを食べていないですから。僕は東京でしたが、お米はないけれど、ほかのものはけっこう量を食べていました。東京の食糧事情ですが、昭和20年は暑かったんですよね。カボチャとサツマイモがものすごくとれたんです。申し訳ないけれど、焼けた敷地をみんな耕して畑にしていた。だから空腹はなかったですね。終戦後は小麦粉が配給されるようになり、木枠を作ってパンも焼いていました。パンにサツマイモを練ったジャムを塗ったりして。それも砂糖がないから塩入りのジャムです。辛くて美味しくはなかったけれど、それがあったから飢えずにすみました。だけど、今はサツマイモとカボチャは食べたくないですね（笑）。

疎開先で思わずやった芋泥棒

榎本　私は引っ越して豊島区の小学校に通っていたのですが、そこで集団疎開に行きました。昭和19年に政府から学童疎開促進要綱が出て、7月に東京都から帝都学童疎開実施要綱が出ました。それで東京、名古屋、大阪といった大都市の子供たちは、近郊のお寺や宿泊施設に一時避難しなさいという命令が出て、どうしても行けない人たちは縁故や知り合いを頼って縁故疎開しなさい、と。それもできない人は残ってもいいということでしたが、８割くらいの子供たちは集団疎開か縁故疎開へ行きました。私の小学校は圧倒的に集団疎開が多かったですね。

　私が疎開したのは昭和19年、小学校６年生の８月です。福島県の原ノ町というところに行きました。今は南相馬市原町区となっています。２５０人以上の子供たちがやってきますから、町では大変だったと思います。原ノ町の学校は大きな学校でしたけれどとにかく引き受けてくれました。集団疎開はお寺に宿泊した人が多かったですが、私たちの学校はすべて宿屋でした。原ノ町で10何軒かに分かれて、いちばん少ない宿屋は私たち11人で、多いところは40～50人が宿泊しました。

――千代田区だと、神田区はお寺で、麹町区は旅館が多かったようですね。

榎本　お寺ですと、80～１００人が一緒に泊まったという例もあるようです。夏はよかったのですが、本堂などは間仕切りがないし、冬は寒くて大変だったみたいですね。

　当時の思い出でいちばん心に残っているのは、泥棒をしたことです。ある家が芋を軒に並

写真を手に当時のことを語る榎本さん。右の写真は、当時、疎開先の宿屋に宿泊した 11 人の児童たち
（3 列目中央のメガネをかけた児童が榎本さん）

べて干していました。私は班長だったからみんなを仕切っていたんですが、身体が大きくて目立ってしまうから、小さい子たちを仕込んでとってこさせていたんです。「ガバッととってくるなよ、少しずつとってこい」と。そうしたら、結局ばれて。先生から「お前がこういうことをするとは思わなかった」と言われたのがきつかったですね。「お前はこういうことを絶対にしないと思って任せていたのに」と、先生が涙ながらに言いました。ぶん殴られるかと思いましたが、片手に水を入れたバケツを持って立たされました。両手で持っていればバランスがとれるのですが、片手で持って立たされるほど辛いことはない。持ち替えてはいけないですから。1時間くらい立たされました。でもそれよりも、先生からの「お前を信用していたのに」という言葉が効きましたね。6年生でいただいた先生の最大のお言葉です。先生のその言葉だけは忘れられません。

昭和19~21年までは日本が猛烈に寒かった年なんです。1週間に何回かお風呂屋さんに行くのですが、帰りに手ぬぐいをあまり絞らないで持って歩くと凍るんです。それでチャンバラをしながら帰っていました。縁があって去年原ノ町を訪ねることができたのですが、そんな話をしたって町の人たちは全然信じてくれませんでした（笑）。

食べるものはやはりなかったです。日に日にやせ衰えていきました。疎開中に、皇后陛下からビスケットが届いたことがあります。人数が多かったので、3枚しかもらえませんでしたが、少しずつなめながら1週間くらいかけて食べた記憶があります。

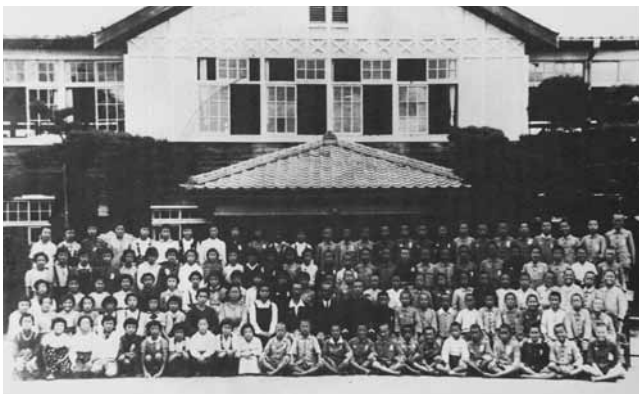
そうして、私たち6年生は卒業するので、翌年の2月24日に東京に帰ってきました。夜行列車で帰るのですが、灯りが漏れると空襲の標的になるからというので、窓の鎧戸を全部下げていました。寒い日だったので、町の人が「ポケットに入れなさい」とふかした熱いジャガイモを2個ずつ持たせてくれました。「これをあんか（小型の暖房具）代わりにして、東京に着いたら食べなさい」と。それで25日に東京に着いたら、その日に空襲があったでしょう。雪と灰が一緒になって落ちてきました。荷物はチッキというのがあって別に送るのですが、駅に取りに行ったら駅も荷物も焼けていたという人もいました。

1年生のとき親元から離れて雪国へ

――小林さんの縁故疎開の話をお聞かせいただけますか。

小林　私は小学校1年生のときです。1・2年生は集団疎開の年齢に達していなかったのですが、友達がみんな縁故疎開でいなくなっちゃうものですから、疎開ってよほどいいものかと思って親に行きたいと言ったんです。今でも覚えていますけれど、昭和19年の12月8日、おや

榎本さんが集団疎開した原町国民学校



疎開先の原町国民学校での小学６年生全員の集合写真

じと一緒に上野から夜行列車に乗り、上越線で越後川口まで行って、そこから飯山線に乗りかえて十日町へ行きました。伯父の家まではそこから2里（約8キロメートル）ありました。あの年は雪が本当に多かったそうで、1丈（約3メートル）降ると言われました。今みたいに車がない時代なので、道の両脇の家がみんな屋根から雪を下ろすものだから、歩くところが高くなっています。雁木という軒先みたいなところを歩いて向かいました。上野から夜行列車で発ったのに、現地に着いたのは翌日の夜になってからです。雪道は慣れないし、おそらくたいした靴は履いていなかったので足がぐちゃぐちゃになって、どこか途中の知り合いの家の囲炉裏で靴下を乾かしたのを覚えています。伯父の家に着いたら家族が箱膳を囲んでいました。農家ですから、入ったところに板の間があり、奥に囲炉裏があってそのまわりでみんながご飯を食べていました。そこには、お祖父さんとおやじの兄夫婦と子供が6人くらいいて、その中に入ったわけですね。伯父たちは自分の家の子と差別しないで扱うということで育ててくれました。

約1年いましたから、真冬の雪の深いときから雪が消えて田植えが始まって、稲刈りが終わるまでを経験しました。神田で生まれた人間にとっては農作業の経験は役立っていると思います。もちろん、当時はそんなことは思いませんが。集落は40戸くらいで、小学校はそこから1キロメートルくらい離れたところにありました。冬は雪道を毎日通って。吹雪のときなどは、帰りの時間に合わせて村から誰かが迎えに来て、みんなで行列して帰りましたね。

榎本　親戚の家では差別なく扱われたということですが、学校などまわりはいかがでしたか。

小林　特にそういうのは感じなかったですね。小学校で「東京から来た」ということは何回か言われた記憶がありますけれど、辛い思いはしなかったです。それよりも親と離れていたからそれが淋しかった。当時、私は弱虫だったものですから、伯父さんや伯母さんに言いたいことが言えないということがありました。いちばんよく覚えているのは、お腹を壊したときです。ちょっと寝間着を汚してしまって。伯母に言えないものだから、近くの水路で自分でこっそり洗濯しました。やっぱり自分の親とは違いますから。今になってはそれも懐かしい思い出です。

食べ物については、米農家ですからお米だけはありました。おかずは古漬けやみそ汁などたいしたものは食べていなかったと思いますが、ひもじい思いはしませんでした。むしろ、東京に帰ってきてから食べるものがないというのを経験しました。終戦後にお腹がすいていたのは皆さんと同じです。

「疎開人」と差別を受ける

榎本　さきほど差別という言葉が出ましたが、私は疎開先で差別されたんです。原ノ町にいたときは差別されなかったのですが、中学生になって今度は栃木県の那須村（現・那須町）に疎開しました。旧制大田原中学校に入りましたが、そこで、焼け出されの疎開人と言われ、ひどい目に遭いました。子供の頃はトラウマみたいになりましたね。

東京から疎開した連中は「東京人」とか「疎開人」と言われました。なにしろ、先生まで言うんですから。例えば、先生が問題を出して、「分かった奴、手を挙げろ」と言うから「はい」と手を挙げると、「なんだ、疎開人のくせに分かるのか」と。田舎の子は1歩2歩引いてから言うところを、東京の子はズバッとすぐ言っちゃうんですよね。しかも江戸っ子ときていますから（笑）。軍事教官なんて、「疎開の奴は1歩前へ」と言って、いちばん悪い仕事を押しつける。とにかく、そういうふうに疎開の連中は差別されました。といっても、玉石混淆で疎開した人の中には悪いのもいたし、私たちは無一文でやって来ているから、地元の人から見たらやっかいなお荷物だという気持ちもあったんでしょうね。

この差別を跳ね返すにはどうしたらいいかと、疎開の連中だけで集まって相談しました。そして「学内で陸軍幼年学校を受けるための選抜試験があるからそれを受けよう」と、みんなで勉強して受けたんです。そうしたら、疎開の連中がほとんど通った。それも比較的上位に入

り、それでいじめはなくなって差別を乗り越えました。おふくろにばれて「死にに行くことはない」と泣かれたので、本試験は受けませんでしたが。

中学校では、私たちの3級くらい上の生徒で予科練に行っている者もいました。栃木県内でも陸軍士官学校や海軍兵学校の入学率が高い、いわゆる進学校だったんです。中学校は、陸軍に半分占領されていました。生徒は正門から入れず、裏門から入っていました。正門から入れるのは軍人だけです。海軍兵学校に入った人たちが生徒の募集のために宣伝に来るんですが、またみんな白い制服で短剣を差して格好いいんですよ。どのくらい偉い人なのか、海軍兵学校の位は陸軍の人には分からないから、門番が号令をかけて衛兵まで立ってあいさつをします。校長でも正門から入れないのに、堂々と正門から入ってくる姿がとにかく格好よくて。そういうのをわざわざ演出して私たちに見せるわけです。そして「飯はたらふく食っているぞ」という話をする。そうするとみんな子供だから憧れてしまう。そういう時代でした。

本物の銃で行った軍事教練

――ほかに疎開や学校での思い出はありますか。

三村　私は縁故もないし、ミッション系の学校でしたから疎開はしていません。私の2つ下の弟は今川小学校だったので、埼玉県の菖蒲町（現・久喜市）のお寺に疎開していました。うちの学校は軍事教練もありませんでしたが、それでも昭和20年の4月から3カ月間はやりましたね。軍事教練といっても、木銃という棒を担いで走るだけです。私は副班長だったんですが、班長が欠席したときに号令をかける係りをやらされたことがあります。でも普段やっていないから分からない。しまいには笑われて終わりました。

榎本　私たちの中学校では三八式歩兵銃という本物の銃でやりました。3年生以上はみんな勤労動員で学校におらず、1年生と2年生しかいなくて、銃を担いで行進させられました。私は身体が大きいほうだったから担げたけれど、身長が150センチメートルあるかないかの奴がいるんですよ。そうすると三八式歩兵銃のほうが大きいから、ひっくり返っちゃって行進なんてできやしない。そうすると軍事教官からサーベル（軍刀）でぶん殴られるんです。軍事教官は怪我か何かをして足を引きずっている人でしたから、今考えてみると、本当は戦場に行きたかったのかもしれません。でも、それがヒステリックに怒るんです。三八式歩兵銃を落としてバタンと倒そうものなら、「天皇陛下の御武器に泥をつけるとは何ごとか！」と死ぬほどぶん殴られるんです。

三村　うちの学校にも三八式歩兵銃はあったけれど、とても担いでなんて歩けないですよ。木銃を担いで走ったって痛いくらいですから。近いから、皇居1周はよく走らされましたね。

髙野　女性だって軍事教練がありましたよ。なぎなたも駆け足もやった。あんなもので「エイヤー」とやっても、勝つわけがないですけれどね。

三村　あと、授業で大変だったのは、教育勅語

と歴代天皇の名前を覚えること。

髙野　神武綏靖安寧…全部覚えさせられたわね。

三村　中学に行くと今度は軍人勅諭を暗記させられる。箇条書きだけれど長いんですよね。今考えてみると、そういうのを覚えることで不平が出なかったんでしょうね。できないとひっぱたかれるから一生懸命やるでしょう。ほかのことなんかあまり考えられない。

小林　文句なんか言えませんよね。意見を言えないような世の中にしちゃった。それがいちばん怖いですね。教育勅語は、私も小学校に入って聞かされたけれど、訳が分からないから終わるとみんな鼻をすすっていました。あれは子供たちの小さな抵抗でしたね。

三村　今のようにまだ世論がいろいろ出るうちは平和な証拠ですよ。これがおさえられるようになると国は危ないです。

2月25日の空襲は大雪だった

――空襲のときのお話をお聞かせいただけますか。

三村　日本の空襲はほとんどが焼夷弾攻撃ですね。一部の工場地帯では爆弾が落ちたけれど、都市部だと爆弾よりも焼夷弾のほうが効果がある。爆弾は破壊して終わりですが、焼夷弾は火事を起こしてずっと燃やしてしまうんだから。当時は無差別爆撃だと言われましたが、とんでもない。ちゃんと碁盤の目を引いて計画されていました。自分の家はなんとか消せても、後ろから火の手が上がるともうどうしようもないです。

髙野　油脂焼夷弾だったのよね。

小林　灯油をまくようなものです。

――焼夷弾は日本の家屋用に作ったのですよね。

榎本　そうです。アメリカはガソリンをゼリー状にする技術を開発したんです。ガソリンだけだったらだめですが、ゼリー状にすると安定する。長さが1メートルくらいの筒にガソリンをゼリー状にして詰めて、火薬を少し入れて落としたんです。しかも、焼夷弾は安く作れるからアメリカはばんばん作った。

三村　中に布が入っていて、それがくっついて燃えるんですよ。

　うちの近くに旧今川小学校があったのですが、学校が焼けてしまうと困るから、当時、強制疎開といって周囲の建物を壊していました。小学校の裏が金物通りで木造の家が20軒くらいありましたが、それを全部壊しました。私も手伝ったことがありますよ。家に切れ目を入れておいて縄を掛けて引っ張るんです。

小林　うちも旧千桜小学校のすぐそばですから、学校のまわりの強制疎開を見ていた記憶があります。

三村　うちが焼けたのは2月25日の空襲です。日曜日で雪が30センチメートルくらい積もっていました。

髙野　あの日は雪がすごかったわね。

三村　その前の年の大晦日に末広町が空襲を受けて、少し家が焼けたんです。お正月が来るのに気の毒だなと言っていたのですが、2月25日でしょう。いきなり昼間ですよ。2時頃かな。神田鍛冶町でも1丁目は日本橋に向かって中央通りがあるでしょう。あの左側が真っすぐやら

れました。

うちのまわりもすべて焼けましたし、焼夷弾2発がうちに当たり燃え出しました。2人の妹は隣の家にお願いして避難させ、しばらく火を消そうとしていたんですが、火の勢いがとても強くて母親と一緒に寛永寺に逃げました。近くに叔父の家があったので、うちが焼けたらそこに行くことになっていたんです。そうしたら、妹がまだ来ていない。母親と叔父が探しに戻りましたが、中央通りが焼けて入れず戻ってきた。そのときに、妹も谷中にやって来てホッとしました。おやじは町の役員をやっており、農業会（今の農協）に食糧の調達へ行って留守でした。弟の疎開先に食糧がないため、その調達をしに埼玉に行っていたんです。戻ってきて焼けた跡を見てショックを受けていました。

髙野　あの空襲は本当に怖かったです。私は父親が4階建てのビルを持っていたので地下に逃げたのですが、他の人に「地下だと死ぬ」と言われたので、中央通りを三越の方に逃げました。でも、三越はすでに満員で入れず、今の三井住友銀行に逃げ込みました。夜10時過ぎには雪もほとんどやんでいたし、父親が警防団で朝から出ていて心配だったのでうちへ戻りました。あの頃はまだ今川橋という橋があって、それを渡ったらうちのところにポッと灯りがついていて、父がいたんです。父の顔は炎で腫れ上がっていましたが、身体のほうはなんともありませんでした。銀行にはまだ母親が避難していましたが、地下と1階は火が入っていなかったので母を連れて帰りました。それから焼け残った1階と地下で生活をしました。

バケツリレーで火を消す

――3月10日の空襲はどうだったのでしょうか。

三村　私は自宅が焼けてから谷中の叔父の家で暮らしていました。家の前が寛永寺の墓地で三角地帯になっているのですが、3月10日の空襲では叔父の家を含めてそこにある3軒だけが残りました。それには理由があって、庭に池があったのと、叔父がドラム缶10缶くらいに水を用意していたんです。JR（当時は国電）の線路の方から火がやってくるから、お屋敷みたいなところの塀を火の方向に倒して食い止めたんです。そして、水があるからみんなでバケツリレーをして火を消しました。うちはみんな江戸っ子なので、この家が焼けたら行くところがなくなってしまいますから。当時はヘルメットなんてないでしょう。綿の入った防空頭巾をかぶり、その上から水をかぶるんです。でも、10分もすれば乾いてしまう。そのくらい火に近づかないと消せませんでした。上野高校あたりの町会は焼けなかったから、明るくなってから応援に来てくれました。なんとか火が消えて、やれやれと思って休んでひょいと見たら、ドラム缶の中に鯉が入っている。誰かがバケツリレーですくったんでしょうね（笑）。それが小学校6年生のとき、卒業間際です。

榎本　3月10日は疎開した6年生も卒業するというのでかなりの子が帰ってきていました。それで亡くなった子がたくさんいます。私は豊島区の自宅にいましたが、神田の方が燃えていると言われ、屋根に上って見ていました。神田は自分の生まれた町ですし、家がありましたから。

B29が飛んでいくのが見えました。B29はぐるりと回って埼玉県や板橋の方からもう1回東京に入っていくんです。そうすると豊島区の上を通るんですよ。B29が胴体のお腹を開け、爆弾が入っている倉庫を弾倉というのですが、その弾倉から焼夷弾を落とすのが見えました。あとで聞いたら、焼夷弾は36本くらいがひとかたまりになっていて、それを落とすと途中でパーンと広がるんですね。さっき三村さんが「布がくっついている」とおっしゃいましたけれど、それに火がついたようになって線香花火みたいに落ちていきました。それを私はこんちきしょうと言いながら望遠鏡で見ていました。

三村　3月10日の空襲のあと、3月17日におやじが亡くなりました。うちのまわりは家を貸している家族が多かったから、おやじは警報が出るたびにぐるりと見回りをするんです。でも終わって寝ようとすると第2波がきて、また見回りに出る。食べるものだって、子供には食べさせたけど、本人はそんなに食べていなかったと思います。過労や空襲での心労などが重なっていたのでしょう。小学校の卒業式はありましたが、ちょうどおやじが亡くなったときだったから行けませんでした。

髙野　私も本当に悲しい思いをしました。私には兄がいたんですが、フィリピンのレイテ島で戦死しました。兄は幹部候補生に受かり、少尉に任官され北満に行っていました。いったん帰ってきましたが、また出兵して。昭和19年、フィリピンのレイテ島はすごい戦場で、そこで亡くなりました。23歳のときで中隊長でした。戦死して大尉になったといってもうれしくないです。もう何と言ったらいいか、戦死だなんて人ごとのように思っていましたが、まさかという思いでした。辛かったです。親はもっと辛かっただろうと思うけれど。もう本当に戦争はこりごりです。

宮城の砂利道で土下座をした

――終戦の日、玉音放送を聞かれたときのことをお聞かせいただけますか。

榎本　私は聞いていませんが、前日に明日の正午は大変な放送があるというのが知らされ、8月15日の朝にも国民は必ず聞くようにと放送されたそうです。

髙野　そう、重大放送があるって。

榎本　8月15日は天気がよくて暑い日でした。私は那須村から中学校まで汽車で通っていたのですが、その日は登校日だったので学校に向かいました。汽車に乗ってきた先輩たちが「今日は大変な放送がある。天皇陛下がどうもお話しをされるらしい」と話しているのを聞きつけた友達がいて。天皇陛下はきっと「お前たちの命を全部私にください」とか「一億一心火の玉だ。玉砕する」ということをおっしゃるに違いないと。「そうしたらどうする?」「そのときはそのときだ」などと言いながら学校に行ったんです。学校の講堂に集まって放送を聞きました。うちの学校は軍隊が半分くらい接収していたので、軍隊の人たちと一緒に聞いていました。内容はよく分からないけれど、どうも威勢がよくない。「私に命をください」なんてことは言っていな

いぞと思っていたら、後からアナウンサーがポツダム宣言の解説をしたんですよ。それを聞いたら、負けたんだということが分かりました。大尉や中尉、将校ら偉い人たちもおろおろ泣いていますし、やっぱり負けたのだと。

三村　私は夏休みでしたから、伯父の家で聞きました。7～8人いたかな。ラジオを引っ張り出して聞いたけれど、何を言われているかよく分かりませんでした。ただ、天皇陛下の言葉に勢いがないということは分かりました。そしたら、伯父が「負けた」と。解説までは聞かなかったですね。

髙野　私は負けると思っていなかったから、負けたと聞いたときは悔しかった。兄もフィリピンのレイテ島で戦死しているし、申し訳ないと。あのときは気持ちが高ぶって、下駄履きで宮城に行きました。結局負けちゃったんだもの、謝らなきゃいけないと思ったんです。今の若い人にはそういう気持ちは分からないと思う。砂利道で土下座して謝りました。まわりもみんな土下座していました。

小林　そのとき、戦争が終わってホッとしたという気持ちはなかったですか。

髙野　なかったですね。われわれの力が足りずにこういう結果になってしまって、本当に申し訳ないという気持ちでした。

――小林さんはどのような気持ちでしたか。

小林　私は子供でしたから、悔しいとか申し訳ないという気持ちはなかったですね。ただ、なんとなくまわり全体がホッとしている雰囲気を感じました。私は戦後の民主主義教育を受けたほうで、小学校、中学校、高等学校と戦争に対する反省に根付いた教育でしたから、ちょっと世代が違うんですね。

榎本　あの頃は歳が2、3年違うとずいぶん違いますよね。

戦中と戦後の天皇像

――戦中から戦後にかけて、天皇像も変わりましたね。

髙野　戦争中は天皇陛下は神様ですから。戦争前ですが、陛下が靖国神社にいらっしゃるとき、私は小学生でしたけれど九段坂に並んでお迎えしました。

榎本　私も小学校2年生くらいのときに、天皇陛下が自動車でお通りになるというので、昭和通りに並んでお迎えしました。「敬礼！」と言われ、おじぎをして直ったらもう通り過ぎている（笑）。でも、疎開で那須村にいたとき、那須の御用邸に陛下がいらっしゃったことがありました。昭和になってから、陛下は炭鉱や農村などいろいろなところを巡行されていました。それで、わが村に天皇がおでましになると大騒ぎになりました。当時、僕ら中学生はその村ではエリートでしたので、陛下をお迎えする指揮を執れと言われて。何かご挨拶を習ってやったとは思うんだけれど、顔を上げてお顔を拝見した記憶があります。

小林　結局、戦後処理という話になるんですよね。日本はGHQのもとに入ったでしょう。天皇が戦争責任を負わないでいいようにしたわけですよね。それが、アメリカがいちばん苦労し

たところではないですか。でも、私たちもあとで勉強して分かってきたことで、そのときは分かってないんです。だから、いろんな意味で幅広く勉強しないとだめですね。

二度と戦争を起こさないために

――皆さんの経験をふまえて、私たち若い世代に何かメッセージをいただけないでしょうか。

小林　私たちは戦争で悲惨な目に遭いましたが、大切なのは戦争を起こさないようにしていかなければいけないということです。それが今の世の中、ちょっと危うい雰囲気になっているように思います。なかなかきれい事ではいかないと思いますが、日本は民主主義の国ですから、個人個人が、特に若い人が、自分でものを考え、自分で行動するということが大事だと思います。

三村　戦争は決してすべきではないけれども、自分たちを守ることも必要だと思います。いざというときに、どこまでアメリカが守ってくれるか分からない。そして、外交は五分に行うべきだと思っています。

榎本　私はときどき戦争の体験を若い人たちにお話しする機会があります。なぜ戦争の話をするのかというと、殺し合いの結末がこういうふうになったということを伝えていきたいんですね。殺し合いの結果、ひどい目に遭ったのは誰かということです。殺し合いはとにかくやめなければいけない、避けなければいけない。殺さなければ殺されてしまうというような切迫感で戦争は起こるわけですから。もうあの戦争のときのような思いはしたくない、それから腹はすかせたくないというと平和しかありません。「平和を」と声高らかに叫ぶより、「死にたくない」「飢えたくない」という思いを確実にしていくことが、殺さない、殺されないというところにつながるのではないでしょうか。結局は人を愛するということだと思います。それがきちんとできれば、戦争は避けられると思っています。

髙野　この戦争で多くの尊いお命が亡くなっていることは事実です。これからは、愚かな戦争は絶対するべきではない。いろいろな問題がありますが、日本は立派な国だし、立派な人間がたくさんいるのだから、もう二度と馬鹿なことはしないでほしいと思います。戦争で亡くなられた方のご冥福を祈るとともに、私たちもまだまだ一生懸命頑張っていこうと思っていますから、若い皆さんもしっかりとこの日本という国を守っていただきたいと切に思います。

写真左から、安田さん、三村さん、西山さん、髙野さん、榎本さん、長嶋さん、小林さん

毎日食べること、生き延びることしか考えていなかった

尋常小学校を出て、医療用の器具を作る工場へ住み込みで働いていた女部田金造さん（85歳）。小学校1年生のときにお父さんが出征し、その後に戦死が確認された櫻井守さん（77歳）。戦争が激しくなるなかで家族と別れ、さまざまな苦労をなさったお二人に当時の記憶を語っていただきました。

おなぶた きんぞう
女部田 金造
富士見

さくらい まもる
櫻井 守
九段北

インタビュアー
三輪田颯真（中学１年生）
吉岡さくら（高校２年生）

家族を離ればなれにする戦争

――まず戦争中、お二人がどこに住んでいたかを教えてください。

女部田　私は本郷（現・文京区本郷）にいました。尋常小学校を出てから、医療器具の工場に住み込みで働いていたんです。陸海軍で戦傷した兵隊さんを治療するために使う、ハサミやメスの加工をする工場でした。

櫻井　私は昭和19（1944）年に、東郷国民学校（現・九段小学校）に入学しました。戦争末期、学校の友達はみんな縁故疎開や集団疎開で東京を離れていましたが、僕の家は両親とも東京出身で疎開する田舎がなかったんです。そのため1年生の終わり頃には、学年に僕ひとりしかいませんでした。

――家族構成を、教えてもらえますか。

女部田　母親は私が7歳の時に死んで、父親は富士見町1丁目で板金工をやっていたのだけど、戦争が始まってからは前橋の親戚の家へ疎開していました。兄弟姉妹は僕のほかに男3人、女が4人。兄2人は戦争へ行ってました。

櫻井　僕の家は5代続く食料品店で、戦争中は配給の仕事を請け負っていました。家族は両親と妹、祖父母、父の弟である叔父の7人。叔父は海軍に志願しましたが、健康を害して除隊した後に病気で亡くなりました。父は僕が小学校1年のときに徴兵されて北支（北支那方面軍）へ入隊しました。そのとき、近所の方が虎の絵の掛軸をくださいました。

――虎の絵、ですか。

櫻井　虎は「千里往って千里還る」といって、無事に帰るようにというお守りだったんです。町内会の婦人部の皆さんも千人針を作ってくれましたね。

女部田　そうそう、国防婦人会でね。

櫻井　そうしてご近所の方や小学校の友達が日の丸を振って見送ってくれる中を、靖国神社まで行進していった父の姿が記憶に残っています。

しかし父は、その年の10月にソ連と満州の国境辺りで八路軍と戦って亡くなりました。僕は長男だったから、青山の日本青年館まで遺骨を取りに行ったんですよ。2月の寒い日でした。市ヶ谷の駅から骨壺を持って帰ってくると、近所の方たちがまた旗を振って迎えてくれました。

女部田　私の上の兄も、テニアン島（サイパン島付近）で戦死。下の兄は広島で原爆に遭って、それがもとで戦後に亡くなりました。むごいことが起こりますね、戦争というのは。

リヤカーから見えたむごい光景

――空襲のときの体験を、聞かせていただけますか。

櫻井　市ヶ谷駅の都営線へ降りるエレベーターがある辺りに、当時は警報を鳴らすサイレンが設置されていました。

敵機が近づくと、まず「プープー」という警戒警報が鳴って、いよいよ爆弾が落とされるときは「ブーッ」って鋭い音の空襲警報に変わるんです。

女部田　ええ、そうでした。

櫻井　それから武道館の辺りに、大きな探照灯（サーチライト）が設置されていましたね。B29なんかが飛んでくると、下から照らして、そこをめがけて高射砲を撃っていた。

――空襲が激しくなってからも、東京にいらしたのでしょうか。

女部田　昭和20（1945）年1月の空襲のときは、本郷にいました。住み込みしていた木造の家は無事だったけれど、道路の向こう側まで全部焼けました。そのとき働いていた工場も焼けてしまったので、池袋の先の千早（現・豊島区千早）の工場へ移ったんです。自転車に荷物を積んだリヤカーをつけて引っぱっていったけれど、池袋駅の辺りで人が死んでいるのをずいぶんと見ましたよ。

櫻井　3月9日夜の空襲では、麹町郵便局のあたりまで焼けました。うちの前の魚屋さんにも焼夷弾が落ちましたが、ご近所の皆さんでバケツリレーや、火たたきといって水を含ませたモップみたいなもので叩いて火を消したそうです。僕は子供だったから、家族の引くリヤカーで市ヶ谷の公園へ逃げて、空襲が止むまでリヤカーの下に隠れていました。

女部田　あの頃は、みんなリヤカーでしたね。

――櫻井さんの、ご自宅は。

櫻井　幸い焼けるのは免れましたが、いよいよ東京にいては危ないということになったのです。父も戦死してしまい、櫻井の家に男の子は僕ひとりだけでしたから。それで神保町にいた母方の叔父が浦和に家を買ってくれて、そこへ2人で疎開することにしました。今は浦和といったら都会だけれど、当時は北浦和から蕨の辺りまで一面、田んぼと麦畑ばかりでした。

――今はビルがいっぱいです。

櫻井　信じられないだろうけれど、5月の空襲のときは、東京の上空からB29が焼夷弾を落とすのが浦和の家から見えたのですよ。

女部田　5月の空襲も、ひどかった。

櫻井　風が強くて、火の回りが早かったそうですね。その日の空襲で自宅は焼け、市ヶ谷の公園へ逃げた祖父が煙にまかれて亡くなりまし

た。その公園に逃げて助かったのは、たった4人だけだったそうです。

いじめの苦しさ、食べ物の貧しさ

――戦争中は、どんなことが辛かったですか。

櫻井　僕は東京の子ですから、土地の子供にいじめられてね。地元の小学校に転入したけれど、朝の集団登校に入れてもらえない。「東京もんは東京へ帰れ」って言われて。他の子が登校する列の後ろを、1人でとぼとぼ歩いて行ったものです。

女部田　世の中全体がぎすぎすしてたから、弱い者いじめは、あちこちであったんですよ。私も親元から離れて住み込みで働いていたから、ずいぶんと辛い目に遭いました。父親は群馬へ引っ込んでしまったから、逃げ帰る家もない。仕事もぜんぜん教えてくれなくてね。横で見て覚えるしかありませんでした。当時はたばこを買うにも行列しなきゃいけないんだけど、先輩の職人さんが、「お前が並んでこい」ってね。そんな使いっぱしりをさせられたり。

櫻井　5月から8月の終戦までほんの数カ月いただけなのだけど、この年になった今でも、浦和に行くのは気が進みません（苦笑）。それくらい、嫌な思い出しかないですね。

女部田　私は自分が嫌な思いをしたぶん、戦後に父親から板金の仕事を継いだときは、下で働く人や後輩にはできるだけ親切に仕事を教えましたよ。

――食べ物にも苦労をなさいましたか。

女部田　本郷の工場は軍隊の仕事をしていたから、国からちゃんとした食糧が配られていたはずでした。だけど製作所の上の人が悪くてね、工場の人間にはまわってこない。トウモロコシの粉ばっかり食べさせられていましたよ。馬のエサかと思うような、ひどいしろものでした。

櫻井　日本は資源の少ない国ですから、戦争末期はお米も小麦粉も不足していましたね。小学校では毎日パンが配られたのだけど、木曜日だけ、真っ黒でぽろぽろに乾いていて、ものすごくアンモニアくさいパンが出たんです。今だったら、とうてい食べられない。あの味は、忘れられないです。

女部田　工場の上の人が田舎に別荘を持っていて、そこへ手伝いに行くとご飯を食べさせてもらえる。それが唯一の楽しみでした。

櫻井　お金持ちのお宅には、お米がありましたね。空襲でそういうお屋敷が焼けると、方々から人がやってきてお勝手の焼け跡を掘り返すんです。すると下から炊けたご飯が出てくることがあるそうなんです（笑）。

女部田　そんなことが、ありましたか。

櫻井　3月の空襲のときは、靖国神社の前にあったお米屋さんが焼けました。その跡地から焦げたお米をもらってきて、その焦げ臭いお米を炊いて食べた苦い思い出もあります。

女部田　お米は、貴重品でしたから。

櫻井　あとは大豆やサツマイモ。今みたいに甘くておいしいおイモじゃないんですよ。もっと白っぽくて水っぽくて、ぐちゃぐちゃしたおイモでした。浦和の疎開先では、その辺の雑草を摘んで食べたこともあります。ちゃんと調べてなかったから、今考えれば毒のある草も食べていたかもしれません。

女部田　空腹になれば、なんでも食べましたからね。

櫻井　毎日、食べること、なんとか生き延びることだけしか考えていませんでした。

女部田　死ぬ危険は、空襲だけではなかった。私は本郷から千早に越した頃、大腸カタルにかかって死にかけているんですよ。1日8回も真っ赤な便が出たけど、医者にもかかれない。近所のお灸屋でお灸を打ってもらって、何とか便は止まったものの、8月の暑い最中に、部屋の窓際にただ横になっているしかありませんでした。最後はもう、涙も出なかった。

櫻井　それは辛かったでしょう。

女部田　そこへ偶然、東京に用事のあったおやじが訪ねて来たんです。それで前橋に連れて帰ってもらったから、なんとか命がつながったのだと思います。

――それが終戦間際のことだったのですね。

女部田　ですから、玉音放送は前橋の親戚の家で聞いたんです。

櫻井　僕も、疎開先の浦和で聞きました。家のラジオはガーガーと雑音ばかりでよく聞こえないので、庄屋さんの家で聞かせてもらうため、叔父と畦道を走って行きました。でも放送には間に合わなくてね。元軍人さんだというおじいさんが、1人で座敷に座っていて、静かな声で「日本は、負けました」と。叔父は、「そうですか、負けたんですか」と答えていました。

女部田　自分も、「ああ終わったか」という気持ちでしたよ。同級生には予科練に行った者もいるから、「そのうちオレも戦争に行くんだろう」と覚悟していたのだけど。今考えると、ばかばかしい覚悟だったね。戦死した兄貴たちも、無駄死にですよ。

――そうした体験を経てこられて、僕たち若い世代に伝えたいことはなんでしょう。

櫻井　戦争とは結局、殺し合いです。人を殺めれば、殺めた人にも苦しみがある。そしてまず犠牲になるのは、底辺にいる弱い人たちです。偉い人たちは安全なところにいて、絶対に死なない。だから勝手なことを言うんですよ。

　僕が父の遺骨を取りに行ったとき、日本青年館に設けられた祭壇では、雛壇の上の方に大将から順番に位が上の人たちの骨箱が置いてあって、遺族に返される順番も先でした。上等兵だった父の遺骨は、ずっと下の方に安置されていて、渡されるのもずっと最後のほうだった。

　それでも「遺骨があるだけいい」と言われたのですから、本当にひどい時代です。

女部田　戦争は、よしましょう！ 戦争ほど無残なことはないです。日本は資源はない、食べ物を作るにもこれだけの土地しかないんだから。みんなで協力してね、平和に生きていくのがいちばんです。

櫻井　日本だけでなく、世界中から戦争がなくなってくれたらと僕は思います。そのためにも、若い皆さんがしっかりと勉強してくれたら嬉しいですね。

写真左から、吉岡さん、女部田さん、櫻井さん、三輪田さん